

《創世記

6章5節～22節》

◆ 読んで・聴いて 思い巡らそう

【メモ・Memo】

- 心に届いたみ言葉
- 時代への呼びかけ
- 「悔い改め」

- 気づき
- 教会に示されたこと
- イエスさまとの関連

◆ 聖書味読 翻訳の違い

創世記 6章5節～9節

●聖書協会共同訳 5 主は、地上に悪がはびこり、その心に計ることが常に悪に傾くのを見て、6 地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。7 主は言われた。「私は、創造した人を地の面から消し去る。人をはじめとして、家畜、這うもの、空の鳥までも。私はこれらを造ったことを悔やむ。」8 だが、ノアは主の目に適う者であった。9 ノアの歴史は次のとおりである。その時代の中で、ノアは正しく、かつ全き人であった。神と共に歩んだのがノアであった。

●口語 6 主は地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛め、7 「わたしが創造した人を地のおもてからぬぐい去ろう。人も獣も、這うものも、空の鳥までも。わたしは、これらを造ったことを悔いる」と言われた。8 しかし、ノアは主の前に恵みを得た。9 ノアの系図は次のとおりである。ノアはその時代の人々の中で正しく、かつ全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。

●新改訳 2017 5 主は、地上に悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった。6 それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。7 そして主は言われた。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜や這うもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを悔やむ。」8 しかし、ノアは主の心にながっていた。9 これはノアの歴史である。ノアは正しい人で、彼の世代の中であって全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。

●フラ 5 主は、人の悪が地上にはびこり、その心の思いが絶えず悪いことにばかり傾いているのをご覧になって、6 地上に人を造られた

ことを悔やみ、心を痛められた。7主は仰せになった、「わたしが創造した人をはじめ、家畜、地を這うもの、空の鳥までも、地の面から滅ぼそう。それらを造ったことを悔いているから」。8 しかし、ノアは主の心にながっていた。9 ノアの物語は次のとおりである。ノアは当時の人々の中で正しく、かつ非の打ち所のない人であった。ノアは神とともに歩んだ。

●LB 5 神様は、人間の悪が目もあてられないほどひどく、ますます悪くなっていく一方なのを知って、6 人間を造ったことを残念に思うのでした。心がかきむしられるようなつらさです。7 「せっかく造った人間だが、こうなった以上は一人残らず滅ぼすしかないな。人間ばかりじゃない、動物もだ。爬虫類も、それから鳥も。いっそもも造らなければよかったのだ。」神様は悔やみました。8 しかしノアは別でした。彼だけは、神様に喜ばれる生き方をしていたのです。9 ここでノアのことを話しましょう。そのころ地上に生きていた人のなかで、ただ一人ほんとうに正しい人が、ノアでした。いつも、神様のおこころにかなう事をしようと心がけていたのです。

●現代 5 主は地上に悪が増え、その心の中で考えることがいつも悪いことばかりであるのをご覧になった。6 それで主は、地上の人間のことを悲しみ、心を痛められた。7 主は仰せられた。「わたしは人を創造したが、それを地上から滅ぼしてしまおう、人ばかりでなく、家畜や爬虫類や空の鳥も皆、絶やしてしまおう。わたしはこれらのものに失望した。」8 しかし、ノアだけは違っていた。彼は主の御心にながっていた。9 ノアのことについて記すと、次の通りである。ノアは、その次代の人びとの中にあつて、彼らの悪に染まらず、神にのみ心を向けて生きていた。ノアはいつも神と共に生活していた。

●70人 5 主・神は、人間たちの諸悪が大地にはびこり、だれもが

心の中で来る日も来る日もあしきことだけに臣をはせているのを見た。
6 神は地の上に人をつくったことを悔やみ、そして（何をなすべきかを）考えた。7 神はつぶやいた。「わたしは自分がつくった人を大地のおもてから抹殺する。人から家畜にいたるまで、這うものから空の鳥まで。これらをつくったことを怒っているからだ。」8 しかし、ノアは主・神の前に恵みを見出した。9 これはノアの系譜。ノアは義しい人だった。その世代（の人びと）の中で完全完璧（トレイオス）だったのである。ノアは神を喜ばせた。

●関根 5 ヤハヴェは地上に人の悪が増し加わり、その心の凶る想いがいつも悪いことのみであるのをご覧になって、6 ヤハヴェは地上に人をお造りになったことを悔い、心に深く悲しまれた。7 ヤハヴェが言われるには、「わたしはわたしが創造した人を大地の面から絶滅しよう。人のみならず、家畜も這うものも天の鳥もみな滅ぼしてしまおう。わたしはそれらのものを造ったことを悔いているのだ」。8 しかしノアはヤハヴェの前に恵みを受ける者となった。9 さてノアの系図は次の通りである。ノアは義しい人であった。同時代の人々の中で全き人であった。神とともに歩いた。

●岩波 5 ヤハウエが見ると、地上には人の悪がはびこり、その心が凶る企てという企ては、終日、ひたすら悪であった。6 ヤハウエは、地上に人を造ったことを悔やみ、心に痛みを覚えた。7 ヤハウエは言った、「わたしは、自ら創造した人を大地の面から拭い去ろう。人だけでなく獣までも、這う生き物までも、空の鳥までも。これらを作ったことがじつに悔やまれる」。8 しかし、ノアはヤハウエの恵みを得た。9 これはノアの系譜である。ノアはその次代にあって義しく、非の打ちどころがなかった。神と共にノアは歩んだ。

◆ み言葉を生き み言葉を伝えるために

① 人間の世界の墮落

神は何をご覧になるのか。どのような備えが私たちに必要なのか。

◆サムエル記上 16:7 しかし、主はサムエルに言われた。「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」

◆マタイによる福音書24:36以下参照

■目を覚ましていなさい 36 「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。37 人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。38 洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。39 そして、洪水が襲って来て一人残らずさうまで、何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである。

② 神がノアに造りなさいと命じたのは「箱舟」だった。

14 節に出てくる「箱舟」と訳されている「テバー」という語は、モーセがナイル川に捨てられた時に用いられるパピルスの「籠」と同じ言葉。そこだけで使われる珍しい語。

なぜそんなものが必要か分からない状態だった。しかし、ノアは、神の言葉・命令に従った。しかも神はその造り方まで細かく指示された。

③ 「アンマ」という大きさは

肘（ひじ）から指先までの長さの単位で約 45 cm。これを元に換算すると、箱舟は、長さ 135m、幅 22.5m、高さ 13.5m になる。排

水トン数4万3千tくらいで、当時にしては想像を絶する大きさ。

④ ノアは神の言葉を聴いてどのように行動したのだろうか。

◆創世記 6:22 ノアは、すべて神が命じられたとおりに果たした。

7章5節、16節でもノアの神への全き従順が繰り返し強調される。ノアは無言である。彼の言葉は記されていない。

◆使徒言行録 16:28-31 28 パウロは大声で叫んだ。「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。」29 看守は、明かりを持って来させて牢の中に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、30 二人を外へ連れ出して言った。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」31 二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」32 そして、看守とその家の人たち全部に主の言葉を語った。33 まだ真夜中であったが、看守は二人を連れて行って打ち傷を洗ってやり、自分も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。

◆ヘブライ人への手紙 11:7-8 7 信仰によって、ノアはまだ見ていない事柄について神のお告げを受けたとき、恐れかしこみながら、自分の家族を救うために箱舟を造り、その信仰によって世界を罪に定め、また信仰に基づく義を受け継ぐ者となりました。8 信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。

⑤ 聖書はノアの存在、そして、態度を通して何を告げているのか。

【佐藤彰牧師の言葉・『まるかじり創世記』より】＊森加筆

滅びと救いを定めた神は、神の命じられたことに従って立ち上

がることを求めておられる。ノアは立ち上がった。長さが 100 メートル以上もあり、幅も 20 メートルを超える大きな箱舟。ノアは神の指示通りに造り始めた。

この箱舟に乗って救われたことも大切だが、この箱舟が天からくだってきたのではなく、ノアの手を通して造られたということも意味深い。

ノアは誰も神の語ることに耳を傾けず、従いもしないような時代に、神の御声に耳を傾け、神が仰せられたとおりに、ひとり箱舟を造り始めた。

長い時間をかけて、箱舟を黙々と造る工程そのものが、ノアの真実な信仰の告白と言えないだろうか。誰も神に従わない時代にあって、「私は徹底してこの神に従う」と健気なまでに自らの信仰の姿勢を貫こうとする。

ノアの一途^{いちず}な生きざまが、ここに来て箱舟を造る後ろ姿に結晶しているようにも思われる。

◆サムエル記上15:22 サムエルは言った。「主が喜ばれるのは／焼き尽くす献げ物やいけにえであろうか。むしろ、主の御声に聞き従うことではないか。見よ、聞き従うことはいけにえにまさり／耳を傾けることは雄羊の脂肪にまさる。

⑥「契約」を立てられた神 6章18節参照

◆創世記 6:18 わたしはあなたと契約を立てる。あなたは妻子や嫁たちと共に箱舟に入りなさい。

ここでは、神が自分に従う者たちを守り、祝福するという約束の意味だが、聖書の中で初めて「契約」（ヘブル語の「ベリース」）が出てくる箇所である。

なお、「契約」は、創世記 9:9、9:12 にも出てくる。

今橋朗先生はこう言う。

「いくら「舟」を建造しても、神がそれを救いの器としてお用いになることを約束し、またノアがそれを信じなければ、箱舟でさえも転覆して沈んでしまうだろう。7章16節でノアと家族と選ばれた動物たちがいよいよ乗り込んだとき、箱舟の戸は、神自らの手で閉ざされた。この救いの舟の扉を開閉する権利は、神ご自身が保有しておられる」。

⑦「箱舟」の構造で心に留めるべきこと

運転するための装置は一切ないのが「箱舟」

この箱舟は装置のことは、何一つ指示がない。帆も、櫓も、舵もない。つまり、この舟は自力では航行出来ないのである。

ただ、神のよしとされる時がきて、神が扉を開くことをおゆるしになるまで(8:15以下)、漂っているための「箱」に過ぎない。しかし、それで十分だった。

⑧ 人とつがいの動物たちが乗り込むことになる「箱舟」は何を意味するか それはキリスト教信仰のまなこで読むならば「教会」である

「教会」は、世の荒波にもまれている、取るにならない小さな群れである。ノアの箱舟の物語は、旧新約聖書を通じて読むならば、神の言葉に聴き従う者たちの共同体である「教会」の物語であることに気付く。

(以上)